【市長メッセージ：北の希望都市札幌を目指して】
札幌市長上田文雄

たくさんのご参加をいただきまして本当にありがとうございます。まちづくりトークということで座談をさせていただきながら皆様方のご意見を拝聴できたらうれしいなと思って、開催させていただきました。

私は今年４月に３期目の選挙を戦わせていただきました。さまざまな問題にこれまでの２期８年に取り組んでまいりました。その成果といったものを皆様方に訴えると同時に、これからのまちづくりをどうしたらよいのかということについての私なりの問題提起を有権者の皆様方に訴えさせていただき理解を得るという作業をしてまいりました。

その上で皆様方からご投票いただきまして３期目を務めることになりましたので、いよいよ私の考え方と今時点における皆様方の考え方をしっかりと統合いたしまして、これからの４年間、しっかり市政を運営するための計画を作りたいということで新まちづくり計画といったものを作る、その中期的な目標といったものを皆さんと一緒に考えたいというわけです。

さらに今、これからの１０年をどうするかということでビジョンを形成しようと、１８日に１０００人のワールドカフェというのを企画しまして多くの市民の皆様方からこのまちのイメージ、どんなところが好きで、こうしないとということを皆で語り合うということをして、できるだけ多くの市民の皆様方の意見を集約し、そしてまた専門的な立場から協議をいただき、これからの１０年、我々のまちの姿といったものを作っていきたいと考えているところです。

私がこの８年の間掲げてきました目標というのは、市民が主役のまちづくりをしていこうということに尽きると言ってもいいかと思います。このまちづくり、これまでの行政と市民との関係といった、ものを与える、あるいは与えられる、要求する、要求に応える、こういう形ではなくて、私たち自身が自分たちの欲するところをどうやったら実現できるのかということを自分たち自身で考えていこうと、そして自分たちでやれることは自分たちでやり、私たちがお互いに支えあっていく、そんな地域社会といったものを作っていくということが大事ではないかということで、自治基本条例というものを作り、市民、行政、企業、いろんな団体の役割といったものをしっかり自覚的に取り組んでいくということをしっかり規定させていただいたところです。

それに基づくさまざまな市民活動がたくさんあちらこちらで起きまして、そして実践的に自分たちのまちづくりに参加するという方々の数を増やしていこうと、こんな取組をさせていただいたところです。

その取組を容易にするために市民活動促進条例といったものを作らせていただきましたし、あるいは市民の中でもとても大事な役割を持っている子どもたちがさまざまな意見を形成し、そして実践することができる、また、そういう実践を通じて自分の意見を形成していくという、そういう循環を作りたいと。いわゆる社会の中における子どもの位置付けをしっかりした子どもの権利条例、子どもの最善の利益を守るための、実現するための権利条例といったものを作って、自治基本条例、市民活動促進条例、さらには子どもの最善の利益を実現するための権利条例、この３条例の実現と言いますか、内容を本当に身近に感じていただき、そしてそれを基にしたまちづくりをしていくということを基にこの８年、さまざまな活動を保証し、場を提供し、人々のネットワークを広げていきたいと、そんな取組をしてきたところです。

どうしてそういうことを言うのかと申しますと、私は市民の皆様方にいろんな形でアンケートを取らせていただいて

いますが、ほぼ毎年このまちどうですか、好きですかという問いを１万人アンケートの中でさせていただいていますが、お手元の資料にあるかもしれませんが、平成１２年、１０年前のアンケートで見ましても９５％の方が「好き」「どちらかと言えば好き」というようにこのまちを本当に好きだというように言っていただける方が圧倒的に多いわけです。

１０年経過しまして、平成２２年にやはり同じ問いを発したところ、やはり９３．９％、ほとんど変わらず圧倒的な札幌市民がこのまちが好きだと言っていただいております。

さらに全国のレベルでこのまちをどう評価するかということについては、例のランキング会社から魅力的なまち札幌という称号を頂戴するくらい全国一魅力的なまちだというように言っていただいているわけであります。市民が大好き、そして日本中から愛されるまち札幌という、こういう恵まれた環境の中にある私たちが、皆が本当に幸せな気持ちになれるかどうかということについて、掘り下げて考えていくということが今求められていると私は思っております。そんな意味で本当にこのまちを愛する気持ちというのはどうやったら実現できるのかということを皆で考えていきたいと思っております。

私の仮説は、単に何らかの行政サービスがすごくいいとか、あるいは自然環境に恵まれているとか、経済の事情がとても儲かってしょうがないというようなことだとか、そういうことではなくて私はやはり自分が本当に実現できている、そのように思えるまち、自分たちで作っているという気持ちを持てるまち、それがきっと一番愛着があり、そしてそこに住んでいる人たちと共に助け合うことができる、そんなまちではないかというように仮説を立てております。

そしてその仮説に基づいてさまざまな助け合いのシステム、あるいは人と人をつなぐシステムを今日まで考え、実践してきたつもりです。それで本当にいいかどうか、もっといい方法はないかどうか、それを今日の座談の中でもどんなまちがいいまちなのかという、まちづくりの知恵をそれぞれの有識者と言いますか、ご意見を持った皆様方からお話をお伺いしながら探っていくということをしていきたいなと考えているところです。

市民が主役のまちづくり、そして市民の力みなぎる、文化と誇りあふれるまち札幌というものを私は標榜し、目標に掲げて取り組んできましたまちづくりの基本方針といったものを、皆さんでもう一度お考えいただきまして、ぜひご意見を頂戴したいと思っているところです。

超高齢社会と、そして少子化、人口減少ということを間近に控えているこのまっただ中にある、そういう社会情勢の中で３．１１東日本大震災が起こりました。そしてさらには福島の原子力発電所がああいう大事故を起こしまして未だに解決の見込みが立っていないという状況があります。私たちにとって人口減少も、あるいは超高齢社会というのも今までかつて経験がしたことがない、そういう時代が、時代の曲がり角ということで我々の身の回りにあるわけです。

これまでの社会システムというものだけでは決してこれからやっていくことができないのではないかというふうに私は考えます。財政事情についても逼迫をしていて、国自体がここまで９００兆円からの借金があるということを見ても、国に何かやってくれと今言ってもなかなか難しいということは、皆さん十分お分かりだと思います。札幌だって借金があります。比較的他の自治体から見れば努力をして何とか健全な財政ということを考えていますが、それにも限界があります。

そんなことも含めて現状をしっかり認識したうえでこれからの札幌のまちづくりを皆でお考えいただければうれしいなと、このように思っておりますので、今日の短い時間ですがぜひ皆さんに参加していただいて、皆さん方のご意見をしっかり頂戴できる時間を確保したいというふうに思っておりますので、よろしくお願い申しあげまして冒頭のメッセージにさせていただきます。ありがとうございました。

座談会

「みんなの知恵と力で豊かさと幸せを実感できるまちへ」

司会兼座談者　吉田聡子氏（株式会社桐光クリエイティブ代表取締役）

座談者　　池田光司氏（池田食品株式会社代表取締役）

座談者　　中島岳志氏（北海道大学公共政策大学院准教授）

座談者　　上田文雄　（札幌市長）

（吉田）座談者は池田食品株式会社代表取締役の池田光司様、北海道大学公共政策大学院准教授の中島岳志先生、上田文雄札幌市長です。そして私池田聡子です。「みんなの知恵と力で豊かさと幸せを実感できるまちへ」と題しまして座談会を始めます。最初に自己紹介と札幌のまちづくりに対してのご意見をお話しいただきます。私から自己紹介をさせていただきます。

私は株式会社桐光クリエイティブという会社の代表取締役です。「伝える」ということを仕事にしています。札幌のまちの魅力、企業の魅力、地域のいろいろな情報をテレビの番組などで伝え、企業、行政、大学のプロモーションなどをやっています。今感じているのは、このまちの価値をちゃんと整理して発信したり伝えたりすることが、もっとできるのではないかということです。新しい取組として、札幌をスイーツのまちにしようという運動を行っています。まちの洋菓子店ほとんどでその年のスイーツを決めて、皆でそのレシピで作っていく。その結果、そのケーキを食べ歩くという文化が作られてきました。小さな洋菓子店に世界、全国から観光客がケーキを食べにくるということが起こっており、観光客が札幌のブランドとして食べに来てくれる。スイーツが札幌の価値を発信する主役になれることも最近実感しています。

（池田）私は製造業一筋でやってきました。本州と比べると少ない業種だが、ものづくりをしていくことが大きな責務と思っています。経営上、重要なのは北海道にある素材と人材です。本州の大資本と競っていくにはこの地域の魅力、特色が私たちの武器になります。

市長がよくいう「市民力」と同じように、私は社員も企業の主役でなければならず、まちづくりと企業づくりはイコールだと考えています。

私の愛する北海道が、札幌が、経済的にも精神的にも豊かになる、そうした活動を続けていきたいと考えています。

（中島）私は大阪生まれの大阪育ち。５年前に北海道にやって来ました。少し大阪との風土の違いを最初は感じました。北海道は、よそ者に対してとても寛容です。そういう自由な雰囲気が非常に好きです。しかし共同体というものの絆が流動的なところが強いという印象も最初は持っていました。そこで人と人が自分が意味ある生き方をしていると思えるような場所、関係性というものをもう１回、この北海道、札幌で作ることができるのかを考えながらいくつかの事をやらせていただきました。

最初はビッグイシューという雑誌の販売です。ホームレスの人が立って１冊３００円で売っています。社会的には疎外されている人たちと市民とが雑誌を売り買いするという関係性を作ることによって、社会的な包摂を作っていくという場を作りたかった。札幌市は、世界で初めてビッグイシューに地下のブースを作っていただき、本部にものすごく評価されました。

他にも本屋さんの地下にソクラテスのカフェというのを作り、皆さんと一緒に政治について語り合ったり、ＦＭの三

角山放送局でフライディズ・スピーカーズという番組をやっており、札幌の小さな所から発信しながら全国に声を届けています。上田市長にも番組に出ていただきました。最近は発寒商店街に人々のコミュニケーションの場所をもう１回取り戻そうということで、カフェ・ハチャムというのを作ったりしています。

（上田市長）札幌での生活は、昭和５３年にやってきて３３年が経過しました。いろんな市民活動をやっているうちに市長選挙に手を挙げて今日に至っております。５年前に中島先生から、ビッグイシューの話をされました。行政とホームレスが関わるのは非常にユニークな活動だということを伺い、行政はいろんな視点からやるべきということを確信しました。また、いろんなカフェが今街中に百数十カ所でき、いろんな人たちが気軽にこのまちのことを考えたり、自分をこのまちで活かしていくための接点、ヒントをつかむ場としてカフェに集まるようです。それとまちづくりセンターのネットワーキングや、行政が今までやれてこなかったこと、いろんなヒントをそこから得るということができれば、もっと素敵なまちになるのではないかということを今考えています。

（吉田）中島先生、活動の具体的な事例とそれに関わることでそのまちの人たちにどんな変化があったかなどをお話しいただけないでしょうか。

（中島）ビッグイシューは３００円で売り、１６０円が販売者に入る。私たちは販売者の人、ホームレスの人に卸をするというのをボランティアでやっています。札幌市の協力で地下のブースで冬場売れるようにしていただきました。

行政的な公共と市民的な公共権が存在するというのが政治学者が考える公共のあり方で、その相互関係、重層的な相互関係が恐らく重要だと思います。ビッグイシューはそれがある程度うまくいっている事例です。

公の中でも行政的な再配分、サービスのことを公助。それに対して市民的な領域、社会的な領域での再配分とかを共助。そして自分自身が自立していく自助。この３つがうまく関わり合いながらサイクルを示していくのがいい関係だと思います。しかし、この１０年間くらい、自助の部分ばかりが言われてきました。そうではなくて、公助と共助の部分をしっかりとリンクさせていく社会が恐らくこれからのビジョンです。そういうような考え方に基づいて商店街にカフェを作ってみました。

商店街はいろんな人が買い物をしたり、話をする長い縁側的機能を持っています。シャッターだらけになった発寒商店街の持っていた機能を作り直し、溜まり場になるような場所を作ろう、そこから商店街が徐々に徐々に発展していくような漸進的に良くなっていくような方法を考えようとやってみたのがカフェ・ハチャム。今では全国から視察に来たりとかいろんな現象が起きてきています。

若いアーティストたちの溜まり場にもなり、カフェ・ハチャムの２号店のようなアートコンプレックスというのができました。そのような連鎖反応が起きてくると面白く、面白いと皆がやる気になり、意味あることだという自覚を持ちます。どのように主体を引き出すのかというのが重要なのかと思います。

（吉田）上田市長が言われた自己実現とリンクしているかと思いますがいかがでしょうか。

（上田市長）自分が今置かれている状況の中で何が必要で、それを実現するためにはどんなアプローチがあるのかということをいろんな観点から発想してみるということが大事ではないかと思います。

（吉田）池田社長はまちづくりや札幌市との関わりはどのようなものでしょうか。

（池田）会社というのは、私はまちの縮図だと思っています。共通するのはどんなに立派な理想を掲げても、実際に市民、社員が山彦のように響いてこなければならないことです。山彦が通い合うまちや会社はとても素敵だなと思います。だから社員が主体の会社は力強いのだと感じています。具体的な実践として、元気な挨拶、決まりを守ること、掃除の３つです。すべて意味があり、そのようなことから社員力を少しずつつけていく。扱う商品も地元のたくさんの素材を使うことによって非常に優位に立てる。ただ、トータルとして北海道の、札幌のブランド力がどうしても必要です。そして地元の企業はもっと磨かなければならない、力を付けなればならない。そのために郷土を愛する人を多く育てて、力になってもらいたいと考えています。

（吉田）上田市長、今の池田社長の話にはいくつかの大きなヒントがあったと思いますが。

（上田市長）企業力、社会的にどういう存在であるのかが、商品に対する個性が生まれるポイントだと思います。そういう個々の方々の努力が、本当に真面目に取り組んでいることが、まちの魅力に絶対発展できると私は思います。挨拶、規則を守る、掃除。これは人とコミュニケーションをとって、社会を規律する規範を守り、環境を浄化していくこと。そういうことに気を配れ、総合的、社会的な人間になれるということだと思います。

（吉田）札幌市のさぽーとほっと基金に池田社長の会社も関わっていますが。

（池田）身障者の万人の響きというコンサートに協力させていただきました。感謝の手紙をいただいたりいろんなことが始まり、社員がそのことでいろんな新しい世界をつかみ始めています。貢献というのはそういうことであり、それがまた社員の力になり、もっと大きなパワーになっていく。違った考え方や違った世界と具体的に接点を持たせることができ、そこから得ることはとても大きい。この基金は皆さんが活用できる身近なものだと思います。

（上田市長）これは市民活動促進条例を作った時に、従来の補助金ではなく市民同士で支え合うことはできないだろうかと設けたのがこのさぽーとほっと基金です。活動に参加できなくても、資金の提供で自らが参加したと同じ気持ちになれる。全国で最も活用されており、もう１億５千万円くらいになっています。

（吉田）市民活動に参加したいがどこに行ったらいいか、何をして良いのか分からないという人も多いのではないかなと思います。中島先生、まちづくりセンターというのは１つそのキーになるのかなと思いますが、この点のお話を少しお願いできますか。

（中島）もう一度行政的な公共権と市民的な公共権の関係にふれます。例えばホームレス。多くの人が前には生活保護を貰っていた人です。その保護をやめて路上にもう一度出る。これは再路上問題というが、これは社会との関係性の問題になります。

生活保護を貰ってアパートで毎日テレビを見ている。簡単に仕事がない。これを繰り返しているともう切れてしまう。孤独で自分は何のために生きているか分からない。生き甲斐がない。だったら仲間のいる街中のほうが楽しいということで出てきてしまう。

市民的な公共権、共同体や社会というものとつながっていないと行政的な再配分がうまくいかないという事例です。

自分が生きている意味があるのだと思える場所。人間の生きる場所、トポスというものがそこにあるのだと思えるこの実感こそが実は多くの人間の生き方というものを多く支えているのではないのかと思います。

共同体的な、社会的な再配分の領域がうまくリンクしていくとこれが回っていき、自助、自立につながっていくという現象が恐らく起きるのだろうと思う。こういう窓口としてまちづくりセンターというのがあります。行政と社会的な活動の接点になる空間、場所というものを実は札幌市は持っています。

しかし、あまりうまくいってないかもしれないなと思う部分もなきにしもあらず。その地域ニーズなどをしっかり吸収して、それをどう政策につなげていくかという、そういう主体性が必要です。まちの人たちのやる気、主体性をどう引き出すのかという能力がこれから公務員に試されている資質だと思います。今の若い人たち、学生は地域共同体や自分たちの仲間、身近なところで自分の意味ある生活、承認されながら生きたいと思っている人たちが非常に多い。地元でしっかりとした関係を持ちながら生きていきたいという指向性のほうが今は強い。だから商店街の問題を一緒にやろうというと、若い学生たちがどーっと来てくれた。発寒がうまくいったのは、北大の学生たちがどーんと参加してくれたというのが非常に大きなファクターになっている。こういうところとまちづくりセンターのあり方というのもうまくリンクして行ければもっとうまく行くのかなと思います。

（上田市長）まちづくりセンターは行政の横の関係、コミュニティを作っていく拠点にしたいと考えました。８年経って少しずつ変わりつつはあります。センターの所長は、地域の方々と良いコミュニケーションをとれる、そういうスキルを持った人、市民との対話能力、情報吸収能力、自分を伝える能力を持つ人が望ましいです。

（吉田）市長のお話に１０年後の札幌という話が出てきました。１０年後の札幌はこうあったらいいなというところをまず池田社長からお願いします。

（池田）１０年後は、女性たちが活躍する舞台というのが一番望まれるかなと思います。東京、ニュヨーク、いろんな所で必ず女性たちが大活躍している。そこのところがやはり活性化している気がします。ぜひ女性たちが活躍する場というのを作っていく。皆で作っていく、そういう気持ちがとても大事なのではないかと感じています。

（吉田）私も子育てをしながら仕事をしています。女性たちが働くためにいろんなサポートも実際必要なのかと思っています。上田市長、女性たちが活躍する未来というのをどのように考えますか。

（上田市長）日本はジェンダー・ギャップ指数が昨年、１３４カ国中９４位。女性が社会的活動をしにくい現状にあるという統計が出ている。人口減少、高齢化社会になると、労働人口がどんどん、どんどん、偏ってくる。女性に活躍してもらわなければならないと、社会全体が多分間に合わなくなってしまうだろうと思います。社会福祉的な側面と経済的な側面から言っても、女性が働いて自分が社会との接点を持てる前向きな社会を作っていくということになる。これはものすごく大事なことだと思っています。当然働きやすい環境を作っていくことを進めていかなければならないと思います。

（中島）日本全国が目指していくべき問題だと思います。今、起きている社会的問題、例えば自殺３万人、あるいは高齢者の孤独死問題、行方不明になっている高齢者問題。幼児の虐待とかネグレクトの問題。これは全部恐らく社会的な関係性の問題に帰結すんだろうと思います。国家と個人の間にある中間的な領域というのをもう一度鍛えていかなけれ

ばいけない。昔の日本社会には村落共同体というのがしっかりあり、この中で社会的に多くの人たちが包摂されていました。しかし、包摂の中に実は徹底した排除の論理が働いていました。こういう社会に戻るということは私は全く思わない。どういう共同制を作るべきかと言った時、「ボンディング」と「ブリッジング」が必要であると言う学者がいます。ボンドとは結束力の強い関係。これにどんどんどんどん橋渡しするのがこれからのネットワーク型のコミュニティのあり方であるというように彼は言います。発寒でカフェを作る時にこの理論を参考にしました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・≪会場からの質問・意見 ≫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（吉田）ここで会場の皆様からの質問に答えるという形で座談会を進めていきます。まず、「カーリング場の完成と来期の世界選手権、２０１７年の冬季アジア大会などが決定していますが、スポーツとまちづくりについてご意見をお聞かせください。札幌でもう一度冬季オリンピックが開催できる可能性はありますか」という質問。これは市長にお答えをお願いします。

（上田市長）冬季五輪は２０１８年の次の４年目、その次の４年目あたりは難しい。しかし、オリンピック以外にもいろんな総合冬季大会、アジア大会や世界選手権などもある。人が交流するのにもとても大事なイベントだと思うし、子どもたちも刺激されて選手になりたいというように思えるような、質の高い競技大会を誘致していくことは大切なことです。カーリング場が来年できるので、カーリングの世界選手権大会誘致に手を挙げています。

（中島）スポーツはもう少し身近なものも必要になっていくのだと思います。発寒商店街でも語呂の合う和寒町と交流し、和寒で盛んな玉入れをやろうとしています。これは子どもからいろんな人が参加しやすい窓口になります。
　どこか遠くにあるスポーツではなくて、その辺で自分たちで考えるとブームが作れるのではないかと思ったりもしました。

（上田市長）豊平川をはさんで綱引きをやるとか昔あったようだが、ああいうのも対抗意識出来てきていいですね。

（池田）私が子どもの頃、札幌で世界大会があった次の年から子どもたちのウェアがカラフルになってすごく感銘したことを覚えている。そういう世界大会から刺激を受けて良いものもいっぱい生まれてくる。どんなささいなものでも世界大会、いろんな国の人たちが来てくれる大会をぜひ誘致する運動を市民とともにやりたいなと思います。

（吉田）世界から人が来るということは世界の文化が札幌にやってくるということだから、すごく発想が刺激されます。次の質問です。
　「先日、札幌駅前通地下歩行空間がオープンしました。それから創成川の公園ができました。こういうことで中心街が変わっていっていますが、これをどう有機的に結び付け、まちの活性化につなげることができるでしょうか。ご意見をお聞かせください。」

（池田）今回、創成川の公園などいろんな所にオブジェを設置したり芸術的な物を展示し、子どもたちがそういった感性に触れていく場面が多いので、そういう方向に向かうのはとてもありがたいと思います。
　ただ、札幌の学校はほとんど真四角で、同じパッケージばかり。空間も含めて子どもたちが発想豊かになるような学

校に改築してもらうことで、豊かな子どもたちが育っていくのではないかと思います。

（吉田）市長、地下歩行空間は歩行するだけではなくて、カルチャーの発信場所ともなっていますが、ここの意義などを教えてください。

（上田市長）歩く所と両側に４メートルずつの幅の広場を作ったところがある。これがこれからの札幌、北海道をさまざまに表現をするスペースで、北海道観光のアピールの場所でもいいし、アートの表現の場所でもいい。素人が、消費者が、市民がそこに申し込んで自己表現する場所。自分も何かやってみたいというチャンスをあの場所は作ってくれるだろうと私は思うし、１日８万人の歩行者に感動を与える場にもなり得ます。
　そのために駅前通と大通に、まちづくり株式会社を２つ作った。まちづくりの中でやるのだという組織運営が望ましい。駅前の賑わいと大通の賑わいがつながり、東西の地下鉄のコンコース、創成川通りの公園を含み、創成川イーストという文化領域を新しく作っていくというダイナミックな都市の連携というものができ、先人が苦労していろんなまちづくりをしてきたものが１本につながっていく。そういう札幌駅前通地下歩行空間の重要性を、本当に大事に大事に、これから使いこなしていきたいと思います。

（中島）これまでの建築、都市設計は目的や機能すべてが上から設計され、意味づけられているようなデザインややり方でした。しかし現代の建築家たちは原っぱが必要だといいます。いろんな主体性というものが生まれてくる、そういう空間の設計のあり方というのが重要だということを議論しています。いろんな主体がそこで引き出される、創発性があるような環境や空間を整えていくことが大事です。そういう空間に地下空間や創成川がなっていけばと思います。元気ショップなどいろんなものもあるから、ある種の共助の領域、空間として活用されるようなことがあれば上田市政らしいような地下空間になるのではないかと思います。

（上田市長）遊園地から原っぱへという話はとても感動的です。私も子ども議会で、子どもたちがジャングルジムなどが設置された公園より原っぱがほしかったという意見を聞いたことがある。全部作り上げた公園など要らなかったというのです。市民にとって満足でもあるし、たくさんお金を使わなくても満足度が高い、これが一番いい行政だと思う。そういうことがやはり創造性を刺激し、発揮する場所を提供する、チャンスを提供することになる。これからの行政がやるべきこととしてとても参考になります。

（吉田）そういう意味では地下歩行空間は市民がそこで発想して、発信して、あそこは玄関口でもあるから、札幌の市民力をアピールするいい場所になっていきますね。今度は意見を少し紹介させていただきます。

（意見１）カフェについてお話がありましたが、外国人や外国で暮らした経験の長い人など、外からの視点をもっとまちづくりに活かせたらいいと思う。
（意見２）市街地を流れる川と周辺の自然を活かしたまちづくりをしてほしい。
（意見３）震災避難民はもちろん、住みよい札幌に移住を呼び掛け、活性化されてはいかがか。

これもいいアイデアですね。ぜひ札幌にたくさん、いろんな視点と能力を持った人が入ってくるとまた札幌に新たな発想が生まれるのではないでしょうか。

（意見４）博物館の建設を希望する。その中に区ごとのスペースがほしい。
（意見５）札幌の観光産業と国際化のために外国人でも日本語の分からない人でも安心して札幌に住めるインフラの整備が必要ではないか。
（意見６）除雪にもっと力を入れてほしい。

（吉田）すべてを紹介できないのですが、まちづくりに活用させていただきたいと思います。
最後に今日のご感想、本日の座談会を終えてのご意見を一言ずついただきたいと思います。

（池田）経営の中に不便を残すという考え方があります。何か不便を残しながら会社を経営しているが、そういったものを取り入れていくことによって参加意識が非常に強まっていくのをひしひしと感じています。
これにはこういう価値がある、不便だから直せではなくて、不便だからこそ自分たちのいい形で活用していこうということが大切である。

（中島）懸念していることは、地方政治というものの、ある独断型政治家の横行という問題です。誰か敵を作ってバッシングしていく。それに皆がカリスマ的に引き入れられていくような政治状況というものが日本の中に生まれているのではないかと思います。
背景にはコミュニティとか社会性の問題が潜んでいるのではないかと思います。政治学では自由というものは２つの概念に区分されると考えます。積極的自由と消極的自由という言い方をするが、消極的自由というのは何々からの自由。それに対して何々への自由。何かに参加することによって自分たちの意思と意見をしっかりと示し合うような自由。何々からの自由を進めていけば人々は孤独になっていく。どんどん不安が加速していき、独断型のカリスマ的政治家にうわっと飛びついていくような状況が生まれます。重要なのは何々への自由です。自分が生きている意味があると思えるような役割、そして空間というものを積極的に引き受け、その中に参加することによって生き甲斐を見出していくような、市長のいう「市民力」、私の言葉でいうと「住民力」というものをつけていかないと社会がもたないと思います。

（上田市長）池田さんが言われた不便さを残すというのはとてもいいと思います。現代社会は便利さの追求によって失った物がたくさんあります。それと大都会の匿名性がコミュニティを破壊し、自分が本当に必要としているものさえも失ってしまう。我々は求めるべきもの、本当に自分の真の豊かさというものが何だったのかということをしっかりと考えたいと思います。
お二人の最後のお話は、まさにそのところをしっかり指摘をしていただいたと思う。会場の皆さん方も、いろいろのお考えをお持ちになったのではないかと思い、心から感謝を申し上げます。

（吉田）今日の座談会からはいくつかのキーワードが見えてきたと思います。人との関係性の中で自分の生きる場所をしっかりと作っていくということがまちづくりの重要なポイントであり、山彦が呼応し合うような札幌のまちになると本当にすばらしいなと思います。
またその１つのキーワードがプラス発想なのかなというふうにも思いました。やはり明るい気持ちで自分たちでやっていこうというようなプラスの発想というのがすごく大事なのかなと、私個人的には感じました。
本当に今日は皆さんと素晴らしい時間を共有できましたことに改めて感謝をいたします。本当に皆様どうもありがとうございました。